学位授与番号	医博乙第1282号
学位授与年月日	平成6年3月16日
氏　　名	五島　敏
学位論文題目	膜性腎症の活動性評価における係蹄壁電顕所見の意義
論文審査委員	主査　教授　小林健一
	副査　教授　竹田亮祐
	教授　中西功夫

内容の要旨および審査の結果の要旨

膜性腎症（MN）の病態は多様であり，係蹄壁電顕所見と予後との関連については，未だ一定の見解がえられていない。今回著者は，初回腎生検電顕所見が，免疫学的活動性の程度および持続期間を反映し，MNの腎機能と寛解状態を予測しうることを明らかにした。

研究方法：特発性MN115例（男性68例，女性47例，年令11－82才，平均50才）を対象に，電顕所見により上皮下沈着物をⅠ期からⅣ期までに分類し，病型，腎機能，寛解状態，再生検時の病期および各種治療に対する反応性について臨床病理学的に検討した。

研究成績：最終観察時の腎機能により，腎機能正常群（Ⅰ群）82例，腎機能障害群（Ⅱ群）25例および腎死群（Ⅲ群）8例に分類しえた。Ⅰ群では，完全寛解（CR）導入率は2年後43.4%，5年後56.7%であり，Ⅱ群（4.0%および9.5%）にくらべ有意に高率であったが（$p<0.001$），Ⅱ群およびⅢ群ではネフローゼ状態（NS）が遷延していた。電顕所見上は，Ⅲ群全例およびⅡ群17例（68.0%）は沈着物がⅠ－Ⅳ期の混合型を示し，Ⅰ群では単一病期の沈着物からなる症例が55例（67.1%）を占めていた。Ⅰ群およびⅡ群の均一型では，CR率は5年後86.0%（Ⅰ群）および28.6%（Ⅱ群）と，混合型（4.2%および0%）にくらべ有意に高率であった（それぞれ$p<0.001$）。さらに，腎機能障害もしくは遷延化したNSを呈した均一型12例中10例では，緻密層まで達する深層型沈着物が観察された。電顕病型別の予後は，深層型沈着物を有しない均一型（53例）では2年後のCR率は61.5%であり，深層型沈着物を有する均一型（10例）14.3%および混合型（52例）2.0%にくらべ有意に高率であった（$p<0.001$）。再生検時の病期は，深層型沈着物を有しない均一型（9例）では，4例が2年後にⅢ期もしくはⅣ期へ推移していたが，深層型沈着物を有する均一型（4例）および混合型（11例）では経時的変化を認めなかった。治療に対する反応性は，深層型沈着物を有しない均一型においてのみ，γ-グロブリン大量療法により，6ヵ月後72.7%に早期寛解導入が認められたが，長期予後に関しては各病型間では治療法による差はなかった。

以上より，免疫複合体の沈着様式を電顕観察することにより，MNにおける疾患活動性とその予後を推測しうることを示した。この成績は，MNの病態および予後を判断する上で重要な臨床病理学的知見であり，腎臓病学に資するところが大きいものと評価された。